

Fig.6.2 (e),(f)

Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight duct calculated by G33-GP code using gamma-rays issuing from the experimental hole of JRR4 and from the PWR spent fuel in remote process cell of Barnwell reprocessing plant. 6.2 直スリット付き遮蔽壁

計算形状はFig.6.1の直ダクト付き遮蔽壁を直スリット付き遮蔽壁に置き換えたもので ある。遮蔽性能計算は入射角θが、(1)15°と30°、(2)許容最小入射角に近い角度、に分 けて行った。

入射角 θ = 15°、30°の計算は、入射ガンマ線が単色エネルギーと連続エネルギーの場 合について、遮蔽壁厚T=75、100、150cmとして行った。連続エネルギーは、①JRR4 実験孔からのスペクトル、②Barnvell再処理工場遠隔プロセスセルでのPWR使用済燃料 を線源とするスペクトルを用いた。スリット幅は、単色エネルギーについてはTable3.4に 示す許容最大スリット幅を用い、連続エネルギーについてはバルク遮蔽壁での線量率の減 衰率からTable3.4に基づいて許容最大スリット幅を定めて使用した。単色エネルギーにつ いての結果をFig.6.3(a)~(f)に示し、連続エネルギーについての結果をFig.6.3(g)~ (j)に示す。補償遮蔽を有する直スリット付き遮蔽壁とバルク遮蔽壁の線量率の比は一部 の計算点で1.0~1.2を示したが、大部分の点では1以下となった。

次に、許容最小入射角に近い角度でガンマ線が遮蔽壁に入射するケースの遮蔽計算を示 す。遮蔽壁厚はT=75、150cmの2種類、入射ガンマ線は単色エネルギーとして0.8MeVと 2MeVの2種類、スリット幅WはTable3.4に基づいて5mmとした。スリット幅5mmの場合 の許容最小入射角 θ 。は(3.22)式から、遮蔽壁厚T=75cmで0.6°、T=150cmで0.3°で ある。本計算では、入射角 θ をT=75cmの場合1°、T=150cmの場合1°と5°の2種 類とした。計算結果をFig.6.4(a)~(c)に示す。同図から明らかなように、線量率の比は 1以下で分布した。



Fig.5.3(a)~(f) Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight slit calculated by G33-GP code for mono energy gamma-ray source

(489)

Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight slit Slit width Compensational shield Slit width Compensational shield Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight slit (cm) thickness (cm) with without (cm) thickness (cm) with without 0.4 0.5 MeV 0.7 0.4 0.5 MeV 0.7 ۵ Δ ۸ 4 MeV 1.0 4 MeV 1.0 0.5 10³ 10³ 10² 10² 10¹ 10 10⁰ 10⁰ 10 10 O X (cm) -2 0 2 -2 2 -1 -1 ſ X (cm) (d) $T = 100 \text{ cm}, \theta = 30^{\circ}$ (c) T = 100 cm, $\theta = 15^{\circ}$ Silt width Slit width Compensational shield Compensational shield (cm) thickness (cm) with without (cm) thickness (cm) with thout Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight slit 0.7 0.4 Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight slit 0.4 0.5 1 MeV 0.7 ۵ . 1.0 0.5 6MeV 1.0 6 MeV 104 10 10³ 10³ 10² 10² 11111 111111 10¹ 10¹ 11 M 10⁰ 10⁰ 10 10 2 0 0 X (cm) 2 -2 -2 X (cm)



(e) T=150 cm, θ=15°



(f) $T = 150 \text{ cm}, \theta = 30^{\circ}$

(490)



Ratio of dose rates behind shield wall with and without straight slit calculated by G33-GP code using gamma rays issuing from the experimental hole of JRR4 and from the PWR spent fuel in remote process cell of Barnwell reprocessing plant. Here, slit width W=7mm and compensational shield thickness U=4mm.

(491)





The air gap width W of the straight slit is 0.5 cm, and the compensational shield thickness U is 0.3 cm.

Fig.6.4 (a)-(c) Comparisons of G 33-GP calculational dose rate distributions behind shield wall with straight slit with and without compensational shield ⁽²¹⁾

6.3斜ダクト付き遮蔽壁

計算形状をFig.6.5に示す。Table3.5に示すアルベド法に基づく許容最大ダクト直径およびそれに近い直径についての遮蔽性能計算を、遮蔽壁厚T=75、150cm、斜ダクトの角度 θ =15°、30°について行い、結果をFig.6.6(a)~(d)に示す。計算は6.1に示した理由により、許容最大ダクト直径が1 cm以上のものを対象とした。計算点は遮蔽壁背面から40cm離れたX軸上に設けた。線量率の比は最高1.3を示したが、大部分の計算点では1以下となった。



Fig.6.5 G33-GP calculational geometry of concrete wall with compensational shield for slant duct

(493)

96



Fig.6.6(a) \sim (d) Ratio of dose rates behind shield wall with and without slant duct calculated by G33-GP code for mono energy gamma-ray source.

(494)

6.4 斜スリット付き遮蔽壁

計算形状をFig.6.7に示す。Table3.7に示す許容最大スリット幅についての遮蔽性能計 算を遮蔽壁厚T=150cm、斜スリットの角度 θ =15°、30°、遮蔽壁に入射するガンマ線 のエネルギーE₀=0.5、2、6MeVについて行い、結果をFig.6.8(a)、(b)に示す。計算点は 遮蔽壁背面から40cm離れたX軸上に設けた。補償遮蔽体を有する斜スリット付き遮蔽壁と バルク遮蔽壁との線量率の比は0.7~1.0の間に分布した。



Fig.6.7 G33-GP calculational geometry of concrete wall with compensational shield for slant slit.

(495)



(496)

6.5 オフセットスリット付き遮蔽壁・段付き円柱プラグ付き遮蔽壁

計算形状をオフセットスリット付き遮蔽壁についてFig.6.9に示す。計算は、間隙幅W =3 cm、遮蔽壁厚T=75、150cm、入射エネルギーE₀=0.8、2MeV,段付き円柱プラグ付 き遮蔽壁のプラグ直径D₁=50cm、ガンマ線ビームの入射角をT=75cmの場合 $\theta = 0^{\circ}$ と -10°、T=150cmの場合 $\theta = 0^{\circ}$ と-8°として行なった⁽²³⁾。ここで $\theta = -10^{\circ}$ と-8°は、 それぞれの遮蔽壁厚において、壁前面の間隙入口と壁背面の間隙出口を結ぶ線と遮蔽壁の 法線とのなす角度である。Fig.6.10(a)~(d)にオフセットスリット付き遮蔽壁における計 算結果を示し、Fig.6.11(a)~(d)に段付き円柱プラグ付き遮蔽壁の結果を示す。これらの 図から明らかなように、補償遮蔽体付き遮蔽壁の遮蔽性能はバルク遮蔽壁のそれより優る。 しかし、線量率がバルク遮蔽壁の値の1/10以下となる箇所もあり、補償遮蔽体の大きさは

過大であると言える。この原因として、第3章で求めた(3.8)式 $\mu_{Fe} = 0.94 \frac{\mu_{con}}{\rho_{con}} \rho_{Fe}$ は

鉄、コンクリートとも点等方線源の再生係数を用いていることが考えられる。即ち、本形 状では、線源側スリット(スリットA)の出口部に設けた補償遮蔽体Aには狭い間隙を透過 したガンマ線が主として入射し、補償遮蔽体Bを透過し検出器側スリット(スリットB)に 入射するガンマ線は主としてスリットに平行なものがスリットB出口に到達するため、点 等方線源の再生係数は過大であると考えられる。補償遮蔽体A、Bの厚さU₁をより適切 にするため、遮蔽壁厚T=150cm、間隔幅W=5 cmのオフセットスリット付き遮蔽壁にガ ンマ線ビームを垂直に入射させ、スリットA透過後に補償遮蔽体Aに入射するガンマ線の 鉄中での線量率をG33-GPコードで計算し、コンクリート厚75~150cmに相当するmfp について、補償遮蔽体Aの平均減弱係数 μ_{Fe,U_1} と再生係数を求めた。鉄の再生係数にこ の値を用い、コンクリートの再生係数に第3章と同じく点等方線源に対する値を用い、ガ ンマ線の壁入射エネルギー0.5~10MeVについて、コンクリート厚75~150cmに相当する平 均自由行程での $\frac{\mu_{Fe,U_1}}{\rho_{Fo}}$ / $\frac{\mu_{con}}{\rho_{con}}$ を(3.7)式から求め、Fig.6.12に示す。上記の入射エネル

ギーおよび平均自由行程の範囲において、 $\frac{\overline{\mu}_{Fe,U_{I}}}{\rho_{Fe}} / \frac{\overline{\mu}_{con}}{\rho_{con}}$ は1.03~1.36の範囲にある。

本形状では、補償遮蔽体A、Bの厚さU₁の決定にFig.6.12から求められる µ_{Fe,U}の最 小値

$$\overline{\mu}_{\text{Fe,U}_{1}} = 1.03 \, \frac{\mu_{\text{con}}}{\rho_{\text{con}}} \, \rho_{\text{Fe}} \tag{6.1}$$

を用いることにする。

また、Fig.3.9の③、④方向に向かうガンマ線の減衰は①の方向よりも急であると考え られる。補償遮蔽体A、Bの横方向の寸法U₃、U₄は(3.37)式から $\theta_2 = \cos^{-1}\frac{1}{\sqrt{2}}$ 方向で 最大値となるので、この方向におけるガンマ線量率の減衰を上記U₁を求めたときと同じ 遮蔽壁形状にてG33-GPコードで計算し、平均減弱係数 $\mu_{Fe, U_{3,4}}$ を求め、

(497)

$$\overline{\mu}_{\text{Fe, U3,4}} = 1.60 \frac{\overline{\mu}_{\text{con}}}{\rho_{\text{con}}} \rho_{\text{Fe}}$$
(6.2)

とする。

したがって、

$$U_1 \ge \frac{\rho_{\text{con}} T}{2(1.03 \rho_{\text{Fe}} - \rho_{\text{con}})}$$
(6.3)

$$U_2 \ge \frac{\rho_{\rm con}W}{0.94\,\rho_{\rm Fe} - \rho_{\rm con}} \tag{6.4}$$

$$U_{3} = U_{4} \ge \frac{0.23 \rho_{\text{con}} T}{1.60 \rho_{\text{Fe}} - \rho_{\text{con}}}$$
(6.5)

となる。

Fig.6.13(a)、(b)に、間隙幅Wを許容最大幅である5 cmとしたオフセットスリット付き 遮蔽壁に(6.3)~(6.5)式で求められる補償遮蔽体を設けた形状について、入射ガンマ線エ ネルギーE₀=0.5、1、2、6、10MeV、遮蔽壁厚T=75、150cm、入射角 θ =0°とした計算 の結果を示す。同図から明らかなように、補償遮蔽体付き遮蔽壁とパルク遮蔽壁との線量 率の比は、入射エネルギー0.5MeVの一部で1.1となり、6、10MeVの1部で0.1以下となる箇 所が見られるが、概ね0.1~1.0の間に分布し、補償遮蔽体付き遮蔽壁の遮蔽性能はパルク 遮蔽壁と同等あるいは優れていると言える。

Fig.6.14(a)~(c)には、段付き円柱プラグ付き遮蔽壁について、プラグ直径D₁=30、 50cmとし、オフセットスリット付き遮蔽壁の場合と同じスリット幅、入射エネルギーおよ び遮蔽壁厚とした計算の結果を示す。線量率の比はオフセットスリット付き遮蔽壁の場合 と同様に概ね0.1~1.0の間に分布している。

もし、入射エネルギーが明らかな場合は、より適切な平均減弱係数を用いることも可能 である。例として、入射エネルギーの最低値を6MeVとした場合のオフセットスリット付き 遮蔽壁の線量率比をFig.6.15に示す。計算は、入射ガンマ線エネルギーE₀=6、10MeV、 遮蔽壁厚T=150cm、間隙幅W=5 cm、入射角 $\theta = 0^{\circ}$ とし、U₁はFig.6.12の6MeVの値か ら、U₁ $\ge \rho_{con}T/2(1.17\rho_{Fe} - \rho_{con})$ としてU₁=25cm、U₂はFig.3.1の6MeVの値から U₂ $\ge \rho_{con}W/(1.11\rho_{Fe} - \rho_{con})$ としてU₂=1.79cm、U₃とU₄については6MeVに対するこ れらの値がU₂よりも小さくなったが、Fig.3.15のオフセットスリット構造を参考にして、 U₃=U₂=1.79cm、U₄=2U₂=3.58cmとした。Fig.6.15から、入射エネルギーに依存し た補償遮蔽寸法を有する遮蔽壁の遮蔽性能は入射エネルギーに依存しない補償遮蔽体形状 の場合よりもパルク遮蔽壁での値に近くなることがわかる。



Fig.6.9 G33-GP calculational geometry of concrete wall with compensational shield for offset slit.

(499)

102



The air gap width W=3cm, and the dimensions of the compensational shield are $U_1=17cm$, $U_2=1.4cm$ and $U_3=U_4=7.8cm$ for the concrete wall thickness T=75cm, and $U_1=34cm$, $U_2=1.4cm$ and $U_3=U_4=15.6cm$ for T=150cm. Fig.6.10(a)~(d) Ratio of dose rates behind shield wall with and without offset slit calculated by G33-GP code for mono energy

gamma-ray source. (21)

(500)



The diameters D_1 and D_2 of the crank plug are 50 and 87.2 cm, respectively, and the dimensions of the compensational shield are $U_1 = 17$ cm, $U_2 = 1.4$ cm and $U_3 = U_4 = 7.8$ cm for the concrete wall thickness T = 75 cm, and $U_1 = 34$ cm, $U_2 = 1.4$ cm and $U_3 = U_4 = 15.6$ cm for T = 150 cm.

Fig.6.11 Ratio of dose rates behind shield wall with and without cylindrical

offset plug calculated by G33-GP code for mono energy gamma-ray source.⁽²¹⁾

(501)



offset plug.





Ratio of dose rates behind shield wall with and without offset slit calculated by G33-GP code for mono energy gamma-ray source. Here, $W=5\,cm$ and $\theta=0^\circ$.

(503)

(504)





Ratio of dose rates behind shield wall with and without cylindrical offset plug calculated by G33-GP code for mono energy gamma-ray source. Here, W=5cm and θ =0°.





5 Ratio of dose rates behind shield wall with and without offset slit calculated by G33-GP code for mono energy gamma-ray source. Here, T=150cm, W=5cm, θ =0°, U₁=25cm, U₂=U₃=1.79cm and U₄=3.58cm.



第7章 1回屈曲ダクト付き遮蔽壁における補償遮蔽体の効果

1回屈曲ダクト付きコンクリート遮蔽壁のダクト周囲に鉄製遮蔽体(以下、補償遮蔽体) を設けることによる遮蔽性能の向上を原子炉を用いた実験によって明らかにする。実験は JRR4散乱実験室にて行なった。実験配置をFig.7.1に示す。1回屈曲ダクトの入口中 心を実験孔出口から550cm離れた実験孔中心軸上の点に固定し、この点を座標軸の原点と して実験孔からコンクリート遮蔽壁に向って左方向をX軸の正方向、上方向をY軸の正方 向、ダクトの第1脚中心軸に沿った線をZ軸で表示する。遮蔽壁は原点を通る垂直線を中 心軸として回転させ、実験孔の中心線とZ軸とのなす角度をFig.7.2に示すように0°、 ±20°の3種類とした。実験はコリメータのある配置とない配置について行い、コリメー タのある配置をNarrow beam 実験、コリメータのない配置をBroad beam 実験と呼ぶ。Fig. 7.3にNarrow beam 実験、コリメータのない配置をBroad beam 実験と呼ぶ。Fig. 7.3にNarrow beam 実験、コリメータのない配置をBroad beam 実験と呼ぶ。Fig. 7.3にNarrow beam 実験の遮蔽壁前面における線量率分布を示す。ダク トの断面は20cm×20cmの短形で、第1、2脚の長さ、遮蔽壁厚、補償遮蔽体の寸法等は Fig.7.2に示す通りである。補償遮蔽体は同図に示すようにA、B、C、Dのブロックに 分けた。各補償遮蔽体配置および補償遮蔽体のない形状について、第2脚ダクト中心軸上 の照射線量率をCaSO₄熱蛍光線量計(松下電器(株)製UD200S)を用いて測定した。

(1)形状A:

Aブロック:鉄

B、C、Dブロック:コンクリート

(2)形状B:

Bブロック:鉄

A、C、Dブロック:コンクリート

(3)形状C:

Cブロック:鉄

A、B、Dブロック:コンクリート

(4)形状D:

Dブロック:鉄

A、B、Cブロック:コンクリート

(5)形状BC:

B、Cブロック:鉄

A、Dプロック:コンクリート

(6)形状ABCD:

A、B、C、Dブロック:鉄

(7)形状N:

A、B、C、Dブロック:コンクリート

Fig.7.3に第2脚内ダクト中心軸上のX=45、60、75cmにおける線量率分布を示す。 Table7.1には第2脚内、X=75cm、Y=0cm、Z=75cmでの補償遮蔽付き遮蔽壁と補償遮 蔽体なし遮蔽壁における線量率の比を示す。

各補償遮蔽体の遮蔽効果は次の通りである。

- 1) Narrow beam 実験
 - (1)形状Aは±20°配置において遮蔽性能の向上が見られる。しかし、0°配置におけ る効果は僅かである。

(2)形状Bでは遮蔽性能は低下する。ただし、遮蔽壁背面に透過するガンマ線に対して は第4章のオフセットスリット付き遮蔽壁の実験で明らかなように有効である。

(3)形状Cは0°、±20°の全ての配置において遮蔽性能の向上が見られる。

(4)形状Dは0°、-20°配置に対して有効である。

(5)形状ABCDは±20°配置に対して有効である。

2) Broad beam 実験

ダクトまわりの遮蔽体透過成分が第2脚内の線量率に大きく寄与し、形状ABCDと形状Dでは全ての角度配置で補償遮蔽体の効果がNarrow beam 実験に比べて顕著に現われている。

これらの実験結果から、1回屈曲ダクト周囲、特に屈曲部のインナーコーナー部に補償 遮蔽体を設けることにより遮蔽性能を効果的に向上させることのできることが明らかになった。



Fig.7.1 Experimental arrangement for gamma-ray streaming through two-legged duct

(507)



(508)



Fig.7.3 Dose rate distribution in front surface of shield wall with two-legged duct

Table7.1 Ratio of dose rate in second leg at X=75cm, Y=0cm, Z=75cm with and without compensational shield

1		Narrow	beam	experi	iment
---	--	--------	------	--------	-------

	Configuration					
θ	А	В	С	D	BC	ABCD
0°	0.946	1.45	0.881	0.832	1.43	1.42
20°	0.679	1.02	0,906	0.933	0.910	0.516
-20°	0.477	0.987	0.338	0.645	0.388	0.131

2. Broad beam experiment

	Configuration				
θ	A	D	ВC	ABCD	
0°	0.885	0.659	1.07	0.839	
20°	0.612	0.839	0.940	0.355	
-20°	0.789	0.293	0.814	0.167	



Fig.7.4(a) \sim (c) Dose rate in second leg

第8章 他の補償遮蔽形状例(3)

補償遮蔽は前述以外の形状も考えられる。本章では直ダクト付き遮蔽壁にガンマ線が一 定角度で入射する場合の補償遮蔽をFig.8.1に示すように遮蔽壁の前面部と背面部に対称 に設ける設計手法を示し、原子炉からのガンマ線を用いた実験により遮蔽性能を確認する。 (1) 設計手法

遮蔽壁厚をT、ダクト直径をd、遮蔽壁へのガンマ線入射角を θ 、補償遮蔽体の厚さを Uとして、Fig.8.1ラインL₃に沿ったガンマ線の減衰を、 μ_{con} と μ_{Fe} およびガンマ線の

コンクリートと鉄の透過距離
$$\left(\frac{T}{\cos\theta} - \frac{d}{\sin\theta} - \frac{U}{\cos\theta}\right) \ge \frac{U}{\cos\theta} \ge \varepsilon$$
用いて、
$$\exp\left\{-\bar{\mu}_{\cos}\left(\frac{T}{\cos\theta} - \frac{d}{\sin\theta} - \frac{U}{\cos\theta}\right) - \bar{\mu}_{Fe}\frac{U}{\cos\theta}\right\}$$

で表わす。この値がパルク遮蔽壁に垂直入射するガンマ線の減衰に等しいとして(8.1)式 を満足するように厚さUを定める。すなわち、

$$e^{-\bar{\mu}_{\rm con}T} = e^{-\left\{\bar{\mu}_{\rm con}\left(\frac{T}{\cos\theta} - \frac{d}{\sin\theta} - \frac{U}{\cos\theta}\right) + \bar{\mu}_{\rm Fe}\frac{U}{\cos\theta}\right\}}$$
(8.1)

(8.1)式は、第3章に示した手法を用いて、コンクリートと鉄の密度 ρ_{con} 、 ρ_{Fe} 、遮蔽壁 厚T、ダクト付き遮蔽壁に入射するガンマ線の入射角 θ で表わすと、

$$U = \frac{\rho_{\rm con} \{d/\tan \theta - (1 - \cos \theta)T\}}{0.94 \ \rho_{\rm Fe} - \rho_{\rm con}} \tag{8.2}$$

となる。

次に、補償遮蔽形状を、ダクトを横切るガンマ線はすべて厚さUの補償遮蔽体を透過す るとして定める。本設計では、補償遮蔽体をFig.8.1に示すように、線源側の遮蔽壁面部 (以下、遮蔽壁前面部)と、線源と反対側の遮蔽壁面部(以下、遮蔽壁背面部)とに2分割し て組み込む。さらに、遮蔽壁前面部に組み込む補償遮蔽体をA₁、A₂に、遮蔽壁背面部に 組み込む補償遮蔽体をA₃、A₄に区分けする。補償遮蔽体A₁~A₄はダクト中心軸を軸と する円板形状で、その厚さはU/2である。各補償遮蔽体はFig.8.1に示すガンマ線が以 下の条件を満足するように配置する。

- (i)ダクト入口部に入射するラインL₁、L₄、L₁₃、L₁₆上のガンマ線とダクト出口部 を透過するラインL₅、L₇、L₁₀、L₁₂上のガンマ線は、遮蔽壁前面部に組み込ま れた補償遮蔽体A₁と遮蔽壁背面部に組み込まれた補償遮蔽体A₄を透過する。
- (ii)ダクト入口部に入射するラインL₂、L₃、L₁4、L₁5上のガンマ線は、遮蔽壁背面 部に組み込まれた補償遮蔽体A₃およびA₄を透過する。
- (iii)ダクト出口部を透過するラインL₆、L₉、L₁₁上のガンマ線は、遮蔽壁前面 部に組み込まれた補償遮蔽体A₁およびA₂を透過する。
- 上記の条件に基づき、補償遮蔽体A₁~A₄の外径・内径を定める。

113

(511)

114

外径D₁は、ラインL₇、L₁₀が遮蔽壁前面を横切る点およびラインL₁、L₁₀が遮蔽壁 背面を横切る点から求め、

 $D_1 = 2 \operatorname{T} \tan \theta + d \tag{8.3}$

とする。内径はダクト直径dに等しくとる。

補償遮蔽体A2、A2の外径D2および内径D2

外径D₂は、遮蔽壁前面から壁内に距離U入った面をラインL₇、L₁₀が横切る点および 遮蔽壁背面から壁内に距離U入った面をラインL₁、L₁₆が横切る点から求め、

$$D_2 = 2 (T - U) \tan \theta + d$$
 (8.4)

とする。

内径D₃は、遮蔽壁前面から壁内に距離U入った面をラインL₆、L₁₁が横切る点および 遮蔽壁背面から壁内に距離U入った面をラインL₃、L₁₄が横切る点から求め、

D₃=2(T−U)tanθ−d (8.5) とする。ただし、D₃≧dの条件からθの適用範囲は、

$$\theta \ge \tan^{-1} \left(\frac{d}{T - U} \right) \tag{8.6}$$

とする。

(2) 実験

実験はJRR-4散乱実験室で行った。実験配置をFig.8.2に示す。実験には、補償遮 蔽体のある直ダクト付き遮蔽壁(以下、補償遮蔽体あり遮蔽壁)、補償遮蔽体のない直ダク ト付き遮蔽壁(以下、補償遮蔽体なし遮蔽壁)およびパルク遮蔽壁を使用した。ダクト付き 遮蔽壁においては、直径8.9㎝の直ダクトを遮蔽壁の前面・後面の中央で壁に垂直に貫通 させた。遮蔽壁厚さTは原子力施設の遮蔽壁厚としてよく用いられる100㎝⁽²⁾を選んだ。 遮蔽壁に使用したコンクリートの原子組成と密度はTable8.1に示す。

遮蔽壁はその中心C(Fig.8.2参照)を実験孔出口から640cm離れた実験孔中心軸上に設置 し、同点を通る鉛直線を中心軸として、上から見て右翅りに回転させた。ここで、中心C を通る遮蔽壁前面・背面の垂線と実験孔中心軸とのなす角度をθとする。したがって、 θ=0°配置のダクト付き遮蔽壁では、実験孔中心軸とダクト軸とが一致する。以下、座 標軸の原点を遮蔽壁背面中心(ダクト付き遮蔽壁ではダクト出口中心に相当する)とし、こ の点を通る遮蔽壁背面の水平線をX軸(遮蔽壁の前面に向って右方向を正とする)、鉛直線 をY軸(上方向を正とする)、壁背面の垂線をZ軸(壁前面方向を負とする。ダクト付き遮 蔽壁ではZ軸はダクト軸に等しい)として記述する。

JRR4実験孔からのガンマ線エネルギースペクトルは、第4章に示すように2MeV以上 が主であるので、本実験においては μ_{Fe} / ρ_{Fe} と μ_{con} / ρ_{con} との関係をFig.3.1に基づい て $\mu_{Fe} = (\rho_{Fe}/\rho_{con})\bar{\mu}_{con}$ とし、(8.2)式を次式

$$U = \frac{\rho_{\rm con} \{d/\tan\theta - (1 - \cos\theta)T\}}{\rho_{\rm Fe} - \rho_{\rm con}}$$
(8.7)

(512)

で置き換え、 $\theta = 7^{\circ}$ 、14°、20°に対する補償遮蔽体あり遮蔽壁を製作した。補償遮蔽 体ありとなしの遮蔽壁の遮蔽性能は、これらの遮蔽壁背面から20㎝後方の水平線上 (0㎝ $\leq X \leq 30㎝、 Y = 0㎝、 Z = 20㎝)における照射線量率(以下、線量率)と<math>\theta = 0^{\circ}$ 配 置のバルク遮蔽壁背面から20㎝後方の点 $P_2(X = 0㎝、 Y = 0㎝、 Z = 20㎝)における線$ 量率との比で求めた。

補償遮蔽体ありとなしの遮蔽壁の背面から20cm後方の水平線上における線量率の測定に は、Victreen社製660-5型ディジタル線量計を使用した。同線量計は円板形で、検出 器窓面積は100cmである。0°配置のパルク遮蔽壁前面の点P₁における線量率測定には、 松下電器産業(株)製CaSO₄熱蛍光線量計素子UD-200Sを使用した。同背面の点P₂に おける線量率測定には、660-5型ディジタル線量計とUD-200Sを使用し、この 点において両検出器の値を規格化した。

θ=7°、14°、20°配置における、補償遮蔽体ありとなしの遮蔽壁の背面から20cm後方の水平線上における線量率と、0°配置のバルク遮蔽壁背面から20cm後方の点P₂における線量率との比(以下、線量率比)をFig.8.3(a)~(c)に示す。

 $\theta = 7$ 配置では、補償遮蔽体なし遮蔽壁での線量率比のピークはX = 4 cmの点にあり、 ピーク値は6.17であるのに対し、補償遮蔽体あり遮蔽壁におけるピークはダクト軸上にあ り、ピーク値は2.36に減少する。

 $\theta = 14^{\circ}$ 、20° 配置では、補償遮蔽体ありおよびなしの遮蔽壁とも、線量率のピークは ダクト軸上にある。補償遮蔽体なし遮蔽壁におけるピーク値は、 $\theta = 14^{\circ}$ 配置で1.30、 θ = 20° 配置で1.17に減少する。

線量率比が1以上の領域は、補償遮蔽体なし遮蔽壁におけるすべての測定点が含まれる が、補償遮蔽体あり遮蔽壁では、 $\theta = 7$ °配置でX<8 cm、 $\theta = 14$ °でX<5 cm、 $\theta = 20$ °でX<4 cmの領域に限られる。

また、 $\theta = 7^{\circ}$ 、14°、20°配置の補償遮蔽体あり遮蔽壁背面から20㎝後方のY=0㎝ の水平線上におけるX=0から18㎝(ダクト半径の約4倍)までの線量率の平均値と、0° 配置のバルク遮蔽壁背面の点P₂における線量率との比は、それぞれ1.1、0.89、0.79であ り、1に近い。

これらの実験結果から、補償遮蔽体あり遮蔽壁の遮蔽性能は、バルク遮蔽壁のそれに近 いと考えられる。

次に、 $\theta = 7$ °用の補償遮蔽体あり遮蔽壁を用い、遮蔽壁を $\theta = 14$ °および20°に回転 させて測定した線量率比をFig.8.4に示す。線量率比のピーク値は、 $\theta = 14$ °で1.13、 θ = 20°で1.03であり、いずれもFig.8.3(a)の $\theta = 7$ °配置における値に比べて低い。ま た、14°用の補償遮蔽体あり遮蔽壁を用いて測定した $\theta = 20$ °における線量率比のピーク 値は1.06であり、Fig.8.3(b)の $\theta = 14$ °配置における値に比べて低い。これらの実験結 果から、ガンマ線の最小入射角を定めて設計した補償遮蔽体あり遮蔽壁は、他の入射角の ガンマ線に対しても、バルク遮蔽壁と同程度の遮蔽性能を有することがわかる。

115

(513)



Fig.8.1 Example of compensational shield for straight duct and critical directions of incident gamma rays



Fig. 8.2 Experimental arrangement of straight duct with compensational shield

			(g/cm ²)
н	0.015	S	0.0020
С	0.0083	К	0.038
0	1.199	Ca	0.154
Na	0.039	Ti	0.0045
Mg	0.014	Mn	0.0012
Al	0.129	Fe	0.052
Si	0.714	Ba	0.0026
Р	0.0014	Density	2.374

Table 8.1 Elemental composition of concrete

(514)



Fig.8.3 Measured dose rates behind shield wall with straight duct with and without compensational shield

Fig.8.4 Measured dose rates behind shield wall with straight duct with compensational shield designed for $\theta = 7^{\circ}$

(515)

第9章 中性子遮蔽壁に対する本設計手法の適用性

中性子用コンクリート遮蔽壁に対する鉄製補償遮蔽体の適用性をオフセットスリット付き遮蔽壁について述べる。線源は14MeVの中性子とし、コンクリート遮蔽壁の厚さは80cm、オフセットは遮蔽壁の中央に設け、スリット幅は1cm、スリット内は空気とした。コンクリートと鉄の原子数密度はTable9.1に示すAllenらのデータ^(*3),^(*4)を使用した。遮蔽壁の形状をFig.9.1に示す。遮蔽壁の高さは150cmである。線源は、同図に示すように、No.1スリット入口面とNo.2スリットの線源側遮蔽壁面への延長面に、垂直入射の面線源として設けた。各線源の面積はスリットの断面積に等しい1cm幅×150cm高さとした。遮蔽性能の検証および補償遮蔽体の寸法決定にはMORSE-GGコード^(*5)を用いた。使用した群定数はGICX40^(**)である。遮蔽性能の評価は0.2MeV以上の速中性子による線量率にて行った。

補償遮蔽体の寸法U₁、U₂、U₃、U₄は第3章で示したオフセット付き遮蔽壁の設計手 法に基づき次式で求める。鉄の平均減弱係数は、Fig.3.15のライン①、②方向は μ_{Fe} で、 ライン③、④は $\overline{\mu}_{Fe}$ でそれぞれ表示する。

$$U_{1} = \frac{\bar{\mu}_{con} T}{2 (\bar{\mu}_{Fe} - \bar{\mu}_{con})}$$
(9.1)

$$U_2 = \frac{\overline{\mu}_{con} W}{(\overline{\mu}_{Fe} - \overline{\mu}_{con})}$$
(9.2)

$$U_{3} = \frac{0.23 \,\mu_{\rm con} \,\mathrm{T}}{(\bar{\mu}_{\rm Fe}' - \bar{\mu}_{\rm con})} \tag{9.3}$$

$$U_{4} = \frac{0.23\,\mu_{\rm con\,1}}{(\,\bar{\mu}_{\rm Fe}^{\,\prime} - \bar{\mu}_{\rm con\,\,})} \tag{9.4}$$

本計算では、1cm幅×150cm高さの面線源からの14MeV中性子がコンクリートに垂直入射した場合の0.2MeV以上の速中性子線量率の減衰(注:線源面の中心を通る線上での減衰)を MORSE-GGコードで計算し、本計算の遮蔽壁厚に相当するコンクリート80cm透過に おける速中性子線量率の減衰から、コンクリートの平均減弱係数 $\mu_{con} = 0.0691 \text{ cm}^{-1}$ とした。

鉄の平均減弱係数 $\overline{\mu}_{Fe}$ は、種々の鉄厚T'での速中性子線量率の減衰から $\overline{\mu}_{Fe}$ (T')を 求めてU₁を(9.1)式で計算し、T' = U₁となる $\overline{\mu}_{Fe}$ (T')を用いることにする。ここで、 $\overline{\mu}_{Fe}$ (T')は上述の面線源を用い遮蔽体を鉄としたMORSE-GG計算による0.2MeV以 上の速中性子線量率の減衰(注:線源面の中心を通る線上での減衰)から求め、 $\overline{\mu}_{Fe}$ を鉄25 cm透過での $\overline{\mu}_{Fe}$ (T')の値0.1829cm⁻¹とし、U₁を24.3cmとした。U₂は(9.2)式から0.7cm

とした。U₃、U₄の決定では、上記計算における $\theta_2 = \cos^{-1} \frac{1}{\sqrt{2}}$ 方向の速中性子線量率の減衰から、 μ_{Fe} と同様の方法で μ_{Fe} を求めて μ_{Fe} = 0.290cm⁻¹とし、U₃とU₄を6cm

(516)

とした。

遮蔽壁背面におけるオフセットスリット付き遮蔽壁(上記寸法の補償遮蔽を有する形状 と補償遮蔽のない形状)の線量率とパルク遮蔽壁の線量率の比をFig.9.2に示す。補償遮蔽 のないオフセットスリット付き遮蔽壁背面の線量率はパルク遮蔽壁のそれに比べて約1桁 高い値を示したが、補償遮蔽を有する場合の線量率とパルク遮蔽壁の線量率の比は0.5~ 1.0の間に分布し、中性子遮蔽壁に対する補償遮蔽体の適用性が示された。

鉄の非弾性散乱のしきいエネルギー(約0.8MeV ^(**))以下の中性子に対する補償遮蔽には 水素含有量の多い物質が有効で、勢中性子に対する補償遮蔽には吸収断面積が大きく且つ アルベドの小さな物質が有効であると推定される。Table9.2にはポリエチレンと水素化ジ ルコニウムの水素含有量をコンクリートと水のそれと比較して示す。ポリエチレンと水素 化ジルコニウムの水素含有量はコンクリートのそれに比べて大である。このうち、水素化 ジルコニウムは除去断面積が大きく^(*9)、MeV領域の速中性子に対する補償遮蔽材として も有効であると推定される。また、水素化ジルコニウムの密度はTable9.2に示すようにコ ンクリートの約2倍であることから、ガンマ線に対する補償遮蔽材としても有効であると 考えられる。なお、原子力船「むつ」では、圧力容器と一次遮蔽体との間の円環間隙をス トリーミングする放射線の遮蔽用として、厚さ約34cmの水素化ジルコニウムが圧力容器蓋 の上部に用いられている(*)。また、鉄は熱中性子に対する吸収断面積が大きく、熱中性 子に対する遮蔽材の1つとして挙げられる⁽⁴⁸⁾。Table4.1に示すコンクリートの構成元素 (H,O,Na,Mg,A1,Si,K,Ca,Ti,Fe)の中で、鉄は、熱中性子に対する吸収断面積が大きく、且 つ熱中性子領域での散乱断面積と吸収断面積との比が小さいことから、コンクリート遮蔽 壁中の不規則形状部の熱中性子に対する補償遮蔽材としても有効であると推定される。こ の他、補償遮蔽材として、ホウ素入りポリエチレンを用いる、あるいはダクトやスリット の壁にボラルのライニングを施すことにより、熱中性子、捕獲ガンマ線および遮蔽体の放 射化を少なくすることが可能であると考えられる。

Material	Density	Element	Composition (in units	
	(g/cm²)		of 10 ²¹ atoms/cm ³)	
Concrete (43)	2.26	Н	13.75	
		0	45.87	
		Å1	1.743	
		Si	20.15	
Iron (**)	7.88	Fe	84.9	

Table 9.1	Compositions of	materials	used	in
	Monte Calro Ca	culations		

(517)